

はじめに

一九九八年の一二月は、私の人生にとって最悪の忌むべき月となった。以来、現在に至るまで二〇年以上の長きにわたって付き合うこととなる「パニック障害」を突然、発症したのだ。不幸は何の前触れも無く、予告状の一枚も無くやってくる。それはまるでベニヤ板の廊下を音も立てないで忍び寄ってくる悪魔やゴーストに等しい。私は当時、高校一年生の終わり。一六歳。高校二年生への進級を間近に控えていた。

私はこの国の最も北に位置する自治体・北海道札幌市の中心部で生まれ、大学生に至るまでの一八年間を、この道都・札幌で過ごした。

私の少年時代は、一言でいえば奇人で知られていた。小学生のころから「歴史群像」(戦史雑誌)や「丸」(軍艦雑誌)、「架空戦記モノ」を読み耽る^{ふける}。出てくる言葉は「憲法改正」。旧日本軍の装備や艦艇が大好きだった。周囲からオカシイ人間だと言われたし、そう思わ

れていた。公立小学校からそのまま公立の地元中学に入ると、勉強はそこそこできた。しかしトップレベルではなかったので、高校進学時には中堅の公立進学校に進んだ。

当時、人口五五〇万人の北海道は典型的な官尊民卑の土地で、殖産の明治時代から官主導であらゆる開発が進んだ。何につけても地元で一番偉く、ふんぞり返っているのは官に属する公務員と特殊法人の役員である。それは子供の教育状況や保護者の教育概念にも色濃く反映され、北海道内のトップとされる進学校のほとんどが公立高校であり、全道人口の半分近くを占める札幌圏では特に札幌市にある道立の「東西南北」という四つの公立進学校へ進むことが、教育熱心な家庭の子弟に求められる至上命題であった。

この「東西南北」から北海道大学（略称・北大。北海道内でここを卒業すると神様扱いされる。中退でも準「神」扱い）へ進学するのが「受験競争のアガリ」として認識されており、事実「東西南北」から北大へ進学し卒業すると、その先に待っているのは北海道の政・官・財を牛耳る出先官庁や東証一部上場企業の札幌本店への就職、という特権待遇である（もちろん、これらの人々の一部はやがて東京に進出する場合がある）。

私は物事に対して研究熱心なほうであったが、それは自分の好きなごく限られた範囲

(戦史や歴史、軍艦など)であって、所謂受験勉強ではなかった。だが、全く受験勉強に無関心というわけではなかったので、「東西南北」ではない第二戦線レベルの中堅公立高校へ進学したのだ。

のちに考えると、この中途半端な私の勉強意欲が、「教育」という価値観を金科玉条として子供に強制して憚らない加虐精神を、私の両親に与えた一因だったのかもしれない。圧倒的な「優等生」であれば、あるいは圧倒的な「落第生」であれば、両親は私に対して強制力を持った「教育虐待」を行わなかったはずだ。「もしかしたらこの子は、受験社会の中でエリートになることができるかもしれない」という甘い期待を両親に抱かせたのは、私が中途半端に受験勉強ができて、その結果として中途半端な進学校に入ってしまったためである。私に非は無いが、今考えるとこれが運の尽きであった。

話を一九九八年の一二月に戻そう。私の在籍していた公立高校は、北の大都市・札幌を擁する広大な石狩平野の端にあった。そもそも、この土地の先住民であるアイヌ民族は、札幌をサツポロ・ペツ（乾いた大きな川）と名付けていた。それを後からやってきた日本

人が音だけ聞いて強制的に漢字に置き換えたのが「札幌」だ。私が何を言いたいのかというのと、この高校は「乾いた大きな川」、札幌市内の辺境にあったということだ。

辺境といつても、それは自虐の一種であるに違いないと思うだろうが、本当に何も無い辺境で、高校の敷地の横には広大な牧場と無秩序な産廃処理施設（複数の焼却炉）があった。なぜこんなところに中途半端な公立進学校が存在するのは、本書が私の母校のヒストリーを語るモノではないので全部省くが、兎に角この年の一二月、私はパニック障害を発症した。しかも重度だ。

忘れもしない。あの時、私は全校集会で体育館の真ん中に立っていた。不意に襲う平衡感覚の欠如、急激な窒息感、全身感覚の麻痺と手足のしびれ、極端で突発的な動悸。今思えばすべて、パニック障害の典型的な急性発作であるが、その時は何が起こったのか分からなかった。立っていられない。地面が斜めになる。息ができない。体育館の天井が今にも落ちてくる——そんな死を伴った恐怖感が全身を襲った。

幸か不幸か、初めての発作は全校集会の終わりかけの時で、大西洋の凶暴なストームの中を沈没しないで持ちこたえている老齢木造船のように、地獄を乗り切った。いや、その

地獄は実際には四、五分程度のモノだったかもしれないが、私には無限とも思える時間を感じられた。これが、私のパニック障害をめぐる、すべての始まりである。

それ以来、二〇二〇年の現在に至るまで、私のこの病気は完治していない。私は現在、パニック障害と鬱病により「精神障害者保健福祉手帳（三級）」を保持している、精神障害者である。正直に話すと、医師の適切な治療により、ここ数年パニック障害はほぼコントロール下にあつて落ち着いている。だが、初めての発作時の様子は、私の脳裏に今も鮮明な記憶と恐怖心を伴って、いつでも高精細の動画として再生することができる。

成人して社会人となり、自分名義の国民健康保険に加入すると、私は自由に、自己の意思で望む医師のいる精神科を受診することができるようになった。後述するが、紆余曲折ののち、現在の主治医に落ち着いた私が抱いたのは、大きな疑問であつた。

それは、なぜ私が、パニック障害という精神の病に罹患しなければならなかつたのか、一六歳以降という青春時代の最も多感な時期を、過酷で重篤な発作の繰り返しで、漆黒に塗りつぶされたものにしなければならなかつたのか、という疑問である。

結論をいえば、約三〇％は気質的なもの。残り約七〇％は環境因子であると医師は診断した。気質的とは、ヒトが生まれながらに持っている性質であり、遺伝的要素も少しだが含まれている。環境因子とは読んで字の如く、自分に依らない、外部からの要素である。

現在、少なからぬ芸能人やアイドルなどが、パニック障害をカミングアウトし、治療のために一時活動を休止したりすることがニュースになっている。少なくとも私の知る範囲で、一九九〇年代後半にパニック障害という言葉は一般的ではなく、単に「不安神経症」とか「不安症」などと呼ばれていた（古くは、「驚愕症」とも）。

現在のように、パニック障害という名称が一般的になったのはここ一〇年くらいの感がある。彼らや彼女らも、十人十色の発症理由があるのは当たり前だが、芸能人やアイドルはテレビや舞台での生放送や生公演などで「失敗してはいけない」という社会通念上、一般人の間よりもはるかに巨大なストレスに苛さいなまれている。その過剰なストレスがパニック障害の発症原因になったと推定するのは難しいことではない。

ひるがえって、私はどうだったのか？ 当時、私はただの男子高校生で芸能人でもアイ

ドルでもなかった。私に降りかかっていた巨大なストレスとは何であったのか？ それは、私の両親からの、「教育」という美辞麗句を借りた過剰な「虐待」に他ならない。

私の両親は、異常なまでに教育熱心で、自らの理想とする「受験競争の勝者」のルールを、私の意思に関係なく、とりわけ顕著に中学校時代から猛烈に押しつけてきた。両親の理想とする「受験競争の勝者」とは、前述した通り北海道・札幌という狭い地理的範囲における受験競争の勝者のことだ。つまり「東西南北」への進学から北大入学↓卒業というコースの達成である。

これを読んでいる読者の皆さんは信じられないかもしれないが、私の両親は、私を「東西南北」中の北海道立札幌西高等学校（「東西南北」の中では、二番手か三番手に位置する）に進学させるという既定方針を、私が幼少の時から綿密に計画しており、勝手に札幌西高のオープンキャンパスに参加して「将来息子をこの高校に入れるのだ」という手前勝手に強烈な妄想を抱いていた。

また、それがゆえに札幌西高の学区内（当時、札幌には厳格な学区制度があった）のマンションを長期ローンで購入するということを本当に迷わず実行した（だから、このマンション

が現在の私の実家ということになる)。これは不動産会社の営業マンに騙だまされたわけでもない、嘘うそでもジョークでもない父親の絶対的で垂直的な意思決定によってなされた本当の話である。

つまり私の人生は、まだ私が何者でもない幼稚園児の時代に、すでに両親から札幌西高進学→北大入学→卒業という風に、「居住地からして」完全に設計されていたのである。当然、私はその事実を知る（理解する）のは少年時代が終わるところである。

詳細は後述するが、私の家は、父は地方公務員（研究職）、母は専業主婦の平凡な中産階級であった。私には七歳年の離れた妹がいるが、妹が誕生する前に、長男である私に「受験競争の勝者」としての姿を徹底的に強制した。

中学のころ、毎日のように父親は、私の勉強不足を叱咤しつたし、「西高に行かない者は人間ではない」と激高して真夜中に説教した。ほとんど毎晩である。母親はというと全く父以上にその教育世界観に同意見で、「中産階級の我が家には（実際には、財産の無い貧乏公務員と言った）、子供に残してやれるものは教育しかない」というのが口癖だった。

ただ、その「教育」というのは、受験競争の勝者が手に入れる「学歴」という世俗的な

意味でしかなく、真に広範な教養を意味するものでは全くないことを補足しておこう。

当時、北海道の高校受験システムには内申ランクというものがあつた。読んで字の如く中学校での内申書のレベルを指すが、驚くことに（現在では廃止されているらしい。これはフエアなことである）、この内申ランクによつて最初から受験できる高校が決定されるというシステムである。

私の両親が、数千万円という、人生で最も高い買い物、長男の札幌西高進学↓北大入學という目論見^{もくみ}だけの理由で購入した算段は、私が中学三年に進むや否や、もろくも瓦解した。

なぜなら、すでに述べたように私は物事に研究熱心なほうではあるが、それは自分の好きな範囲だけの話であり、受験勉強には「それほど」熱心ではなかったからだ。だから高校受験時、私の内申レベルはDランクで、絵に描いたような中堅クラス（最上位のAから数えて四番目である。下から数えると六番目くらいである）だった。

しかし、両親が私の幼稚園時代から密か^{ひそ}かに計画し続けていた札幌西高進学に必要な受験資格は、最低でもCランク（上から三番目）である。だから私には、いくら受験日当日に

テストの成績が良くても、札幌西高を受験すること自体が不可能という物理的障壁が^{しゅつ}出^{たい}来^{たい}したのだ。

両親は、この事実^{じじつ}に猛烈に怒り狂った。父親は「ゴミ」「クズ」「低能」と私を面罵して、「これまで我々がお前にかけて費用（塾代、生活費、飲食代、小遣いなどもろもろ）を返せ！」と怒鳴り散らす。これを読んでいる皆さんには想像できないだろうが、本当に私の父親は、未成年者で扶養家族である私に、「お前に投資したカネを返せ！」と唾を飛ばして迫った。母親はあろうことか、私をベッドに押さえつけて私の左耳を強く殴打し、「教育的指導」を実行した。実はこの時の殴打が原因で、左の鼓膜が破裂し（病院に行かせてもらえなかったので、この傷害の事実が判明するのは厳密に言えば数年後である）、以後十数年間（大学卒業後に至るまで）、左の耳の奥に何となく違和感が残るとい^いう後遺症を負うことになる。現在であれば全国報道されるほどの立派な虐待行為、そう、「教育」を笠に着た「教育虐待」とい^いうべきものだが、自身の被害状況を、私は第三者に伝えるすべを持たず、また第三者を介して解決するとい^いう発想も、およそ持ちえなかったのである。

このような、両親による教育虐待は、私が前述した中堅高校に進学すると、とりあえず

一時的にだが一旦収まった。なぜなら、当たり前前のことだが、「東西南北」という札幌市内でのエリート高校に進学しなくとも、北大進学の見目は残されているという事実を両親が知ったからである。

実際、私の高校は当時一学年約四〇〇人。そこから北大に進学（現役・浪人を含め）するのは毎年一五〜二五人というところであった。これが北海道内の中堅進学校の実力である。つまり、二流進学校でも、その上位五％程度は、北大に進学する可能性が残されていたのである。これを知った両親は、私の二流進学校への進学自体はシステム上致し方ないとしても、その上位五％に入ることを熱望した。

ところが、ある母集団の上位五％に入ることがどれほど難しいことであるか、ということと両親は想像しえなかったようだ。つまり逆にいえば、私の高校の卒業生の九五％は北大に進学しないのである。

普通に考えれば、根が墮落的、享乐的にできている私が、この母集団の上位五％に入ることのできない人間であることなど、直感的に分かろうというものだが、両親は私の高校時代の最後の最後まで、この上位五％に入ることこだわった。高校一年生半ば以降（初

手の高校一年生の前期、私の成績は最悪で、留年一步手前だった)、いよいよ客観的に私の北大進学が不可能だと判明するや否や、父親はまたぞろ例の「ゴミ」「クズ」「低能」と私を面罵して、さらに「これまで我々がお前にかけて費用を返せ！」と暴言を吐き、最終的には私の顔を全力で殴打するという暴挙に出た。

ただし、普段外面はおとなしい、羊のような地方公務員であった父は、人を殴り慣れていなかったらしく、あろうことかその拳は私の顔面ではなく、明後日あさっての方向、つまり私の個室の扉の蝶番ちようつがいを殴り、それが元で後日発生した良性ガングリオン(結節腫)を全部私のせいにして、「お前が馬鹿なせいだ」「病院の治療費を払え」などと理不尽な罵声を浴びせた。

一方、母親は私が高校に入ると鼓膜破裂に至るような直接的暴力に出ることこそしなくなったものの、私の成績不振を毎日糾弾し、その当時、発症・罹患していた難病(潰瘍性大腸炎)の病状悪化はすべて私のせいであると、宗教的呪いの言葉を浴びせ続けた。

そればかりではない。母親の究極的な虐待は、弁当制であった高校の持参弁当にわざとゴミを入れたり、自宅でシャワーを浴びている時に、わざとガス供給の元栓を寸断して北

海道の真冬の浴室で冷水を浴びさせたり、果ては「教育的指導」と称して、私の部屋のドア（誤解が無いように断っておくが、部屋の出入り口のドアである。覗き窓とかではない）を、蝶番ごと取り外して薄い布を一枚垂らし、リビングにいる両親から私の一挙手一投足を全部監視できる「代用監獄」を作り上げるまでに至った。

はつきりいって、ここまでくると常軌を逸している。父と母は、私の高校時代に「教育」を盾にとつて本当にこれらのことを全部、私に対して躊躇なく、「正義である」と信じて実行した。これが教育虐待ではなくて何だというのか。

こうしてみると、私のパニック障害の発症は、明らかに両親の教育虐待に起因する青春期の過大なストレスが原因であると断定して間違いは無いのではないだろうか。前述したように、私の主治医は、その原因の約三〇％は気質的、約七〇％は環境因子という。

その言葉をそのまま評価するなら、私の障害の大半の責任は両親にある。が、精神障害の当事者として、一六歳という多感な青春時代になぜ突然、パニック障害を発症したのかという問いは、今にしてみればその気質的要因がいかなる比率を占めていようと、ほぼ一〇〇％、私の両親の身勝手に自己中心的な教育虐待のせいであると断定できる。そして

それは、パニック障害発症後、二十余年を経た現在だからこそいえる「一患者」としての客観的観察であり、客観的洞察であり、そして総合的判断である。

この書は、私が実の両親への恨み節を赤裸々に書くものではない。「教育虐待」という、子供に対して「教育」（実際には受験競争での勝利という、ただそれだけの意味）という美辞麗句を用いれば、どんな加虐も正当化されるという、保護者の一部に存在する普遍的な闇を世間に知らしめるべく筆を執りたいと思った。

私は、現在結婚して、四歳（二〇二〇年現在）の息子がいる。この息子に対し、私は現居住地である千葉県において、前述した札幌市の「東西南北」と同クラスの進学校に入るべく、学区を調査して長期ローンを組んでマンションを購入するという、歪ゆがんだ価値観や目論見を全く持っていない。そもそも、自分が住む県や地域においてどの高校（あるいは中学）が進学校かという情報自体に、何の興味も無い。

息子の人生は息子自身で決め、その結果も責任も息子自身が全部背負うものだと思っている。だから私はまだ幼い息子に対し、理想的に設計されたゴール地点への到達など微塵みじん

も期待していないし、ただの一瞬も、その虚像の栄光の姿を思い描いたことすら無い。中卒でも高卒でも通学拒否でもFランク大卒でも専門・高専卒でもそこそ有名大学卒でもあるいはそれらいずれかの中退でも、そんなことは息子の人生に対する親としての接点として、全くどうでもよいことだ。息子の人生は息子が主体として決定するべきことであり、親が一切関与するべきことではない。

しかしこの国には、そんな当たり前の、子供が持つ普遍的な権利——「子供の権利条約」で定められたもの、とあえていうべきか——を一切根底から無視し、自らの理想や欲望、コンプレックスの穴埋めの道具としてしか子供を扱えない、ナチ的と形容してもよいほど、常識的世界観が欠損した親が存在する。

そしてそれらの親は、自らの行為が単なる自分の欲望やコンプレックスの裏返しであるのに、それをひた隠し、「教育」だの「我が子の将来のため」だのという、おおよそ誰も反対しえないお題目を振りかざして、精神的・肉体的な虐待を長期にわたって加え続けている。その結果、子供が重い精神的疾患となり、その疾患を一生背負っていかなければならない結果が生まれる可能性など、全く考えてもいないし想像もしていない。

私は、幸いに現在、モノを書くということを生業としている。よって筆の力で、私自身が教育虐待の被害者であるという立場から、教育虐待の被害者である子供の普遍的人権を守るために微力ながら立ち上がりたい。子供は、生まれ出る家庭を選ぶことはできない。が、精神的にも肉体的にも保護者から虐待を受けない権利を、これまた生まれ出ると同時に持っているのだ。これは絶対に守られなければならない。

不幸にして私は、かなりの部分において、両親による教育虐待でパニック障害を発症して精神障害者となったが、このような人間を二度と出してはならないと決意する。

よく障害は個性だというが、私はできるなら、パニック障害など経験しない人生を送りたかった。人並みの人生を送りたかった。ただそこに存在するだけで、窒息感や麻痺や平衡感覚の暴走や死の恐怖を延々と味わい続けることの、どこが個性だというのか？

そんなものは単に拷問である。そして私は、このような拷問の根本原因を私に（厳密な過失割合の認定はさておき）恒常的に与えた両親を赦す^{ゆる}つもりは、現在も毛頭無い。全く無い。

両親の教育虐待のせいで精神障害になったのなら、それは個性などではなく純然たる被

害者である。私はこのような不幸な被害者を、これ以上出したくない。私はモノを書くということでも世間に意見を表明できるし、それが鬱憤の解消になっているが、社会通念上の常識として、モノを書くことを仕事にできるのはマジョリティーではないからだ。

教育虐待によって理不尽に精神を病み、不幸のどん底に叩き落とされ、その後遺症で二〇代になっても、三〇代になっても（あるいはそれ以上）、その苦しみを言葉で表現して公論に問えない者のほうが多いだろう。まさに教育虐待による沈黙の被害者が、この国には多く存在すると私は思う。そういった無辜の被害者の言葉を、心の叫びを、微力ながら私は、筆の力で代弁したいと思った。

そして「私だけは（そういった教育虐待をする連中とは）違う」とタカを括って自分の子供に接している保護者たる父・母は、本当にそれが事実なのか、第三者から客観的に見て本当にそう評価されうる絶対的自信があるのか、もう一度真摯に点検して自分の世界観と子供への接し方を精密に内省してほしい。

また、自らの狭い価値観の中ではまだ分からないだろうが、自身が両親などから受けているストレスが「教育虐待」であるかもしれないと疑問を持つことで、そこに一縷の解決

の可能性を願う列島全土の、知的探求心のある子供たちに対して、本書を送りたいとも思う。

君たちの未来は決して明るくないかもしれないが、幻滅して絶望するほどではない。その証拠に、私は現在でも生存しているし、そしてこうして諸君らの意見を代弁して加害者に反撃している。負けるつもりも、座して死を待つつもりもない。教育虐待当事者への反撃の狼煙のろしの第一段階として、もしこの本をテキストの一つに挙げてくれるのであれば、著者としてこれ以上の喜びはない。